



「毎日、波音を聞きながら暮らせることが幸せ」と話す佐々木昌則さん

南三陸なうな人

【佐々木昌則さん】

「袖浜」とともに、
これからも。

袖浜に生まれ、袖浜の海とともに育った男にとって、この夏はきつと忘れえぬものになるだろう。待望の再オープンを迎える「サンオーレそではま」を眺めるのは、民権神崎荘の佐々木昌則さん。

「私が子どものとき、夏は一日中、友だちとこの海で泳いでいたなあ」と佐々木さんは振り返る。

高校卒業後、町外に出た佐々木さんが、家業の養殖業と民宿を継ぐ決断をしたのが平成17年。夏は海水浴客でにぎわい、増室を決意するなど軌道に乗ってきたときに、東日本大震災が発生した。想像を絶する津波の様子を、ただぼうぜんと眺めていた。

県外での避難生活中も抱き続けた故郷への想い。震災から4年がたつ平成27年3月、明神崎荘として新たなスタートをきった。かつての常連さんとの再会、新たな出会いが、佐々木さんの支えとなり原動力となった。そして、迎える海水浴場の再オープン。

「この浜にかつてのにぎわいが戻るんだなあって考えると感慨深いですよ。うちは小さい宿だけど、その分一人ひとりと密な関係を作って、『この町に来てよかった』と思ってもらえるようにしていきたいですね」

南三陸なう 検索 佐々木さんをもっと詳しく知りたい人は、南三陸公式ブログ 南三陸なうをご覧ください。

ネイチャーセンター準備室だより

「八幡川河口での干潟生物調査」

志津川高校自然科学部の活動として、八幡川河口での干潟生物調査がスタートしました。震災後にできた干潟にどのような生物がすみついているか調べるのです。

干潟は陸と海の間に砂や泥が積み重なってできる湿地です。潮の満ち引きによって常に新鮮な水が出入りするため、ゴカイや貝、エビやカニの仲



間などさまざまな動植物がすんでいます。生物多様性が高く、大きな動物の保育所のような役割を果たしたり、水鳥たちの餌場になったりと、多くの生き物たちを育む大切な存在です。

震災前は松原公園だった八幡川右岸の河口は、震災の津波によって防波堤が崩れ、磯浜となりました。ここはかつて天然の砂浜で、海水浴や潮干狩りが行われる干潟でもあったのです。震災後は防潮堤建設により埋め立てられる計画でしたが、志津川地区まちづくり協議会の提案により防潮堤を陸側にずらし、干潟が守られることになりました。今回の調査では絶滅危惧種など希少な生物も複数確認され、生き物たちにとっても重要な干潟に戻っている様子が確認できました。今後も継続して見守っていかれたらと思います。

☎ 農林水産課 ネイチャーセンター準備室 ☎25-9703

東北管区行政評価局長表彰を受賞



5月31日（水）、ホテル法華クラブ仙台で行われた行政相談委員全体会議において、本町行政相談委員の高橋才二郎さんが東北管区行政評価局長表彰を受賞されました。

高橋さんは、平成17年4月に総務大臣から行政相談委員の委託を受け、国・県・町などに対する苦情や要望の解決に尽力されており、その功績が認められ、今回の表彰となりました。

高橋さん、おめでとうございます。

みな
レポ



人権擁護委員の日に啓発活動を実施



近年の人権問題は、さまざまなストレスに起因する子どもや高齢者への虐待、女性への暴力、インターネットを悪用した人権侵害など、複雑・多様化しています。身近な相談パートナーである人権擁護委員は、人権擁護委員法に基づいて、人権相談を受けたり人権の考えを広める活動をしている民間ボランティアです。

6月1日（木）の「人権擁護委員の日」、町営戸倉復興住宅の集会所において、人権擁護委員と地域住民との交流会が開催され、人権擁護委員が家庭内の悩みごとや隣近所とのトラブル、いじめなどの問題に対してどのような取り組みを行っているのかなど、人権に関する啓発活動を行いました。

若手漁師が漁業の魅力を伝授

5月26日（金）、志津川小学校でJFみやぎ志津川支所青年部による漁師の出前授業が行われ、4年生39人がワカメの苺めき体験をしました。伊勢竜哉くんは「初めて苺めきをやった。こつをつかめば簡単に楽しかった。ワカメはお汁に入れるのが好き」と笑顔で話してくれました。

今回の授業を行った青年部長の菅原由輝さんは「南三陸町にはこんなに素晴らしく、おいしい物があるというのを子どもたちに知ってほしい。そして、それを作っている私たち漁師の仕事を知ってほしい。今後も授業を継続していきたい」と話しました。

